
晴れ間

朝月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晴れ間

【Nコード】

N1271C

【作者名】

朝月

【あらすじ】

灰色の空の下。僕は「誰か」を待つ。

息が白い。

空は重く、灰色だ。

寒い。ひどく寒い。

僕は凍えた指先に息をはいた。

少しも温まりはしない。

なぜ僕はここにいるのだろう。

1度も来たことが無いはずなのに。知らないはずなのに、

ひどく懐かしい。

目の前を通り過ぎてゆく、人、人、人、

誰も僕に気づきはしない。

誰も僕に気づいてくれない。

たまに、僕のほうを振り返る人がいる。

僕は死んだ。確かに死んだ。

何も覚えてはいない。

ただ僕の心で燻^{なか}っているのは、

「死」という残酷な記憶。

僕の足元には、綺麗な花が置かれている。

僕が死んだのは、ずっと昔ではないらしい。最近だ。

僕の家族。友達。いたかは分からないけど、愛しい恋人。

何も覚えてはいないのだから、

僕に語りかけていた「家族」も、ピンとこなかった。

多分、父であろう人は僕に「なぜ自殺なんかしたんだ」と言っていた。

僕は、自殺したのか。

そう思ったけど、別に悔しくはなかった。

今、僕の足元で僕の名前を呼び、泣き崩れている女の人は、多分恋人。

僕の愛していた人だ。

そう思うと熱くなった。

僕はここで「誰か」を待っている。

漠然とだが、分かる。

とても逢いたい。

ただ、今ここで泣き崩れる恋人でも、家族でもないことは分かる。

早く逢いたいな、

その「誰か」が来てくれるまで、僕は待つよ。ここで。

いつまでも、

逢わないと、僕は楽になれないと思うから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1271c/>

晴れ間

2010年10月17日02時26分発行